

紅葉にみる進化の物語



文と写真●阿部 真 Abe Shin

森林植生研究領域

赤く色づいたカエデ
小川群落保護林（北茨城市）にて

北 海道ではもう紅葉が始まりました。赤や黄の前の線は大雪山の峰々を下り、日本列島を南へ西へと向かいます。つかのま彩られた葉が落ちると、まもなくモノトーンの冬が訪れます。葉は植物の生産工場ですが、生産効率の悪い季節も養い続けるのは負担です。そこで、厳しい季節を乗り越えるために、多くの樹木は一時的に葉を落とすことを選びました。では落葉する直前に葉が色づくのは、なぜでしょう？

紅 葉は、葉で合成された糖やアミノ酸を材料として、赤い色素（アントシアニン）がつくられることで発色します。いっぽう黄色い色素（カロテノイド）は常に葉にあります。光合成を担う緑の色素（クロロフィル）にかくされていて、ふだんはみえていません。落葉前になると、クロロフィルが分解されて枝に回収されるので、後に残った黄色がみえるようになります。

ではなぜ樹木は、赤い色素をわざわざ作ってから落葉するのでしょうか？

理 由は、まだよくわかっていません。何かの働ききの副産物か、かつての意味が失われたのか。しかし、紅葉が生存に有利な戦略でないのなら、同じ種の中でもっと色や濃さにバラツキがでて良さそうです。実際は、イロハモミジやナナカマドは鮮やかな赤、ミズキやウワミズザクラはくすんだ赤、イタヤカエデやヤナギは黄、ブナやトチノキは褐色といった具合に、樹種ごとに色あいがおおよそ決まっています。

色 が鮮やかな樹種ほどアブラムシの寄生が多いことから、つぎのような仮説も提案されています。植物には、虫など動物の食害に対抗して防御物質を作る性質があります。このため動物の側は、防御の弱い木を選ぶように進化することが考えられます。すると樹木は、「おれは生産力に余裕があるから守りが堅いぞ」という食害者へのアピールとして、紅葉が進化したというのです。木々の彩りが動物にどうみえてくるかはさておき、秋の紅葉に、進化の物語を想うのも一興かもしれません。♣

①ブナ ②イタヤカエデ ③イロハモミジ
④サクラ ⑤コナラ

リサイクル適性の表示：紙ヘリサイクル可

この印刷物はグリーン基準に適合した印刷材料を使用し、環境にやさしい印刷を行っています。

18.09.10000

Forestry & Forest Products
Research Institute
No.42 2018季刊
森林研究

特集●

木材利用の伝統と先端

巻頭対談●

森にお返しをする「しなやかな建築」

建築家 隈 研吾 × 沢田 治雄 国立研究開発法人 森林研究・整備機構 理事長



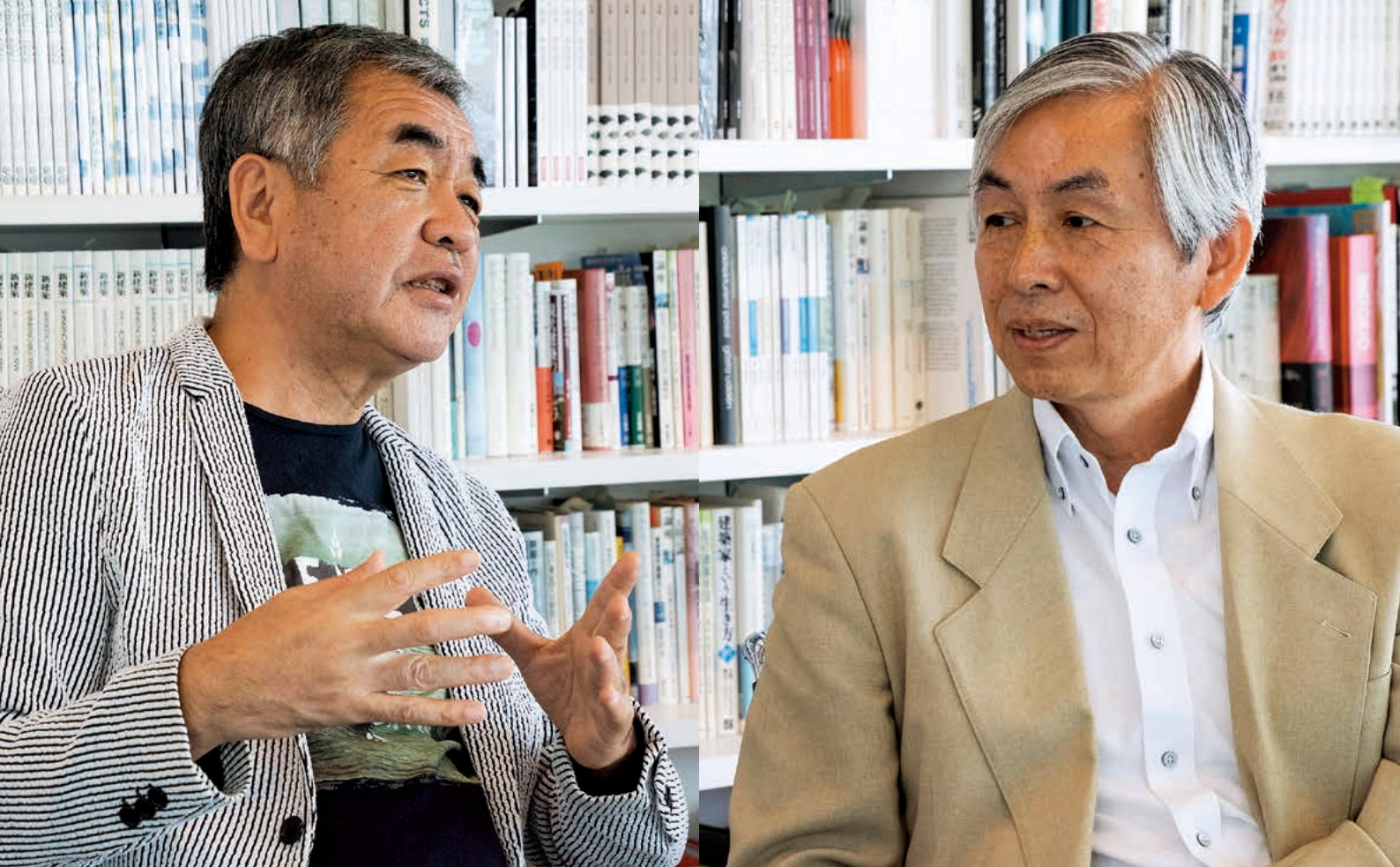


Photo by Keiko Godo

巻頭●対談

森にお返しをする「しなやかな建築」

建築家 隈 研吾 × 沢田 治雄 国立研究開発法人 森林研究・整備機構 理事長

素材を探求しつつ、環境と調和した建築を設計してきた隈研吾氏とリモートセンシングで、人工衛星から自然の変化や人の営みを探ってきた当機構理事長の沢田治雄氏に、森林環境と木材と建築をめぐるお話をうかがいました。

沢田 ●私はリモート・センシングが専門ですが、当初は人工衛星から地球をみても、分解能が低くて一軒一軒の家までは見えなかったのです。それで自然の季節変化など、グローバルな部分から人の営みを探るということを研究してきました。隈さんは、建築と自然の調和を考えておられるようですが、その発想の原点は、どのあたりにあるのでしょうか。

隈 ●生まれ育ったのが戦前の木造の家だったんです。むかしの木造の家の気持ちよさというのは、家単体で存在しているわけではなくて、まわりの環境を含めての気持ちよさなんだと、しだいに気づきました。これまでの建築教育では、単体の家の形をどうするかということばかりを考えて、まわりの環境のことまではあまり考えてこなかったように思います。形の美しさを追求するのが建築家の仕事であって、建築家は巨大な彫刻家みたいな扱いだったと思うんですね。

そうした建築というものから、もう少し外の環境の世界へと思考のフレームを拡張できないものだろうか考えたわけです。最近のリモートセンシングも非常に精細な精度でものがみえるようになって、すごく大きいところから小さいところへと向かってきた世界かと思いますが、ぼくの場合は、逆に小さいところから大きい方向に向かって世界を広げてきたのかなという気がします。

沢田 ●原点は、子ども時代を過ごされたご自宅にあったのですね。

隈 ●夏になると風のおいがちがってきたりとかですね、そうしたことをすごく覚えてま

CONTENTS

Forestry & Forest Products Research Institute

No.42 2018



今号の1枚 (写真=神戸 圭子)

Forest for Living (隈研吾建築都市設計事務所) 中国上海 2013 年設計・施工。合板を嵌合のシステムで自在に組みあわせることによって、木々のすきまのようなスペースを生みだし、森のようなくらしの共用空間をつくりだしている。

イラストレーション：飯島 満
(P.11、13、15)

特集担当●

原田 寿郎
桃原 郁夫

編集委員●

尾崎 研一 (編集委員長)
桃原 郁夫
片岡 厚
星野 大介
長倉 淳子
牧野 礼

巻頭●対談

森にお返しをする「しなやかな建築」

建築家 隈 研吾 × 沢田 治雄 森林研究・整備機構 理事長
..... 3

特集●

木材利用の 伝統と先端..... 8

監修：軽部 正彦 構造利用研究領域

研究の森から●

木造でビルが建つ！..... 14
宮武 敦 複合材料研究領域

木材の生理的リラックス効果
香り・手触り・足触りから..... 16
池井 晴美 構造利用研究領域

森林講座瓦版●

木材とプラスチックを融合させてつくる
新しい材料 (木材・プラスチック複合材) 18
小林 正彦 木材改質研究領域

インフォメーション●..... 19

平成 30 年度森林総合研究所公開講演会 森林総合研究所研究報告 次号の特集

自然探訪●

紅葉にみる進化の物語..... 20
阿部 真 森林植生研究領域



<https://www.ffpri.affrc.go.jp/pubs/kan/index.html>

▲既刊号は、上記サイトにて PDF でお読み頂けます。
二次元バーコードまたは、アドレスにてアクセスください。



季刊「森林総研」 2018 (平成 30) 年 9 月 14 日発行

編集●国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所 広報誌編集委員会
発行●国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所 企画部広報普及科
〒305-8687 茨城県つくば市松の里1番地 TEL.029-829-8373 FAX.029-873-0844
URL <https://www.ffpri.affrc.go.jp/ffpri.html>

企画制作・デザイン●栗山淳編集室

印刷●株式会社 光和印刷

©本誌掲載記事及び写真の無断転載を禁じます。



隈 研吾（くま けんご）

1954年横浜生まれ。建築家。1979年東京大学建築学科大学院修了。1964年東京オリンピックの時にみた丹下健三の代々木屋内競技場に衝撃を受け、幼少期より建築家をめざす。コロンビア大学客員研究員を経て、1990年隈研吾建築都市設計事務所を設立。2001年より慶應義塾大学教授。2009年より東京大学教授。

「工事現場を訪れるのが、いちばんの息抜きです。オフィスの中で図面ばかり見ていると、無性に現場にいった実物に触れたいくなります」

巻頭●対談

木と竹というのは、人間の身体と相性がいいんじゃないかと思うんです。

垣はつくりますが、天守閣は木でつくられています。戦う場なんだけれど、木の温もりといったものの中で戦うという、そうした不思議な緊張感が日本の城の独特な世界感をつくりあげていると思います。競技場も、ある意味で戦いの場です。そこが木で囲われるというコンセプトに、日本の城と共通のものを感ずました。

隈●競技も戦いではあるんですが、同時に自分がリラックスして最大限の能力を発揮しなくてはならない、そういうときには木というのはきつとプラスに働くだらうと。いま城の話がうかがって、確かに似てるなあと思いました。世界に対して日本らしさを発信するいい場になるかもしれないですね。

沢田●法隆寺にみられるように長い歴史がある日本の木の文化の中で、新しい国立競技場が何世紀も後の人たちにも、木の競技場として親しまれたならうれしく思います。

ところで、そうした長期的なメンテナンスは可能なのでしょうか？

隈●日本の木造の面白さは、構造だけじゃなくて、長期的なメンテナンスのシステムができていところだと思えますね。サステイナビリティという時代を先駆けた発想で、ちゃんとメンテナンスのことを考えて最初からつくっていた。法隆寺がどうして世界最古の木造建築になったのかというと、細かいところにあるんな工夫がしてあって、屋根を支える垂木は、奥にものすごく長く突っ込んであるのです。そして、先端が腐ってくるんだんだんそれを引っ張り出してきて、使えるよ

うになってるんですね。それで、いよいよ長さが足りなくなったら、それをまた取り替えることが出来る大きなメンテナンスシステムの一部としてのデザインになっている。

今回の新国立競技場も、木は全部規格がユニット化されていて、そのユニットごと取り替えることができるようにデザインしています。そういう意味で法隆寺からも、いろんなことを学ばせて頂きました。木は石と違って永遠じゃないことを前提としたサステイナブルなシステムをつくりあげたところは、現代人が学ぶべきところですね。

沢田●素材と技法を中心に東京ステーションギャラリーでやってもらった隈さんの展覧会＊では、入口を入るとまず竹が迎えてくれて、入りやすくインパクトも大きかったのですが、竹や木材はやはり他の素材の中でも特別の思い入れがあるものですか？

隈●ぼくの育った家が木でできていて、裏が竹林だったという個人的な思い出もあります。それだけじゃなくて、いろいろな素材を調べれば調べるほど、木と竹というのは、人間の身体と相性がいいんじゃないかと思うんです。たとえば石だとかコンクリートの壁というのは、からだに触れると冷たいし、強くぶつかるって怪我をする。やはり人間のからだとの相性はあまりいいとはいえません。それにくらべて木や竹は、近くにいただけで人間のからだから安心するような効果があります。また、「にこい」が持っている治癒効果というとも言われています。展覧会では、いろいろな素材を並べて、それぞれの実験の結果

★ Key Words 新国立競技場

2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックのメイン会場として、国立霞ヶ丘陸上競技場跡地に大成建設・梓設計・隈研吾建築都市設計事務所共同企業体の設計によって建設が進められている競技場。明治神宮外苑に隣接することから「杜のスタジアム」がコンセプトとして謳われている。

図版＝©大成建設・梓設計・隈研吾建築都市設計事務所共同企業体。
注）図は完成予想イメージであり、実際のものとは異なる場合があります。
植栽は完成後、約10年の姿を想定しております。



す。建築の体験というのは、じつは形がどう美しいという以上に、環境をどういうふうに感じることが出来るのかということが、いちばん大きいのかなと、生まれ育った家を思いだすたびに、気づかれます。

沢田●隈さんは、環境に対して「呼吸するようになしなやかに反応するデザイン＊」ということを言われておられますね。私たちは森林環境を研究対象として、これまではCO₂を吸収して地球温暖化を緩和するといった研究もしてきました。しかし、環境の悪化が進行する中で、人類はさらなる対応が求められています。「しなやかさ」というのは、環境の変化に反応することが出来るような建築というふうに受けとりました。

隈●建築物は環境のコントロール機能とか、環境全体を改善する機能を持つてるものだと思うんですね。たとえば、どこかの向きの風をどう取り入れて、地面からの湿度をどう避けるかといった快適な温湿度環境をつくるコントロール装置という部分も持ってますし、じつはもつと枠組みを広げていると、建築物に木を使うということは、その木の中にCO₂を貯めこんで、地球温暖化の緩和に多少なりとも貢献しているでしょう。単体はすごく小さいものですが、そこでは、地球環境に対するインパクトがあることを小さいものを通じてやってるんじゃないかと思っています。

沢田●新国立競技場＊についてお話をうかがいたいのですが、明治神宮は、鎮座祭が1920年でしたので、ちょうどオリンピックのときに100年を迎えます。当時、あの

神宮の杜＊は、全国の樹が10万本寄進されてつくられました。その杜に連なる形で新国立競技場がつくられるというのが、とても面白いと思います。軒底には全国の木材が使われるとうかがっていますが、そのアイデアは、どこから生まれたのでしょうか？

隈●1960年の東京オリンピックのときは、鉄とコンクリートの時代で、最先端をみせるということが時代のテーマだったと思うんです。でもいまは、そうしたいちばん尖った最先端のものをみせるというよりは、むしろ日本各地にはさまざまな自然が残っていて、それぞれの地方にそれぞれに素敵な森があつて、いろんな職人がいてという、そうしたことをみせる場にするほうが、2020年という時代にはふさわしいんじゃないかと感じたんですね。それをいけばわかりやすくみせるには、全国の樹を使うことかなと考えたわけです。じつは、47都道府県全部のスギ（沖縄県はリュウキュウマツ）を並べて見てみたんです。そして、面白いほど色がちがうんですね。おなじスギといっても、日本の多様性というのは、こんなところにも現れていると思いました。それを外装の中でいけば一目立つ部分に使うということになったということなんです。

沢田●神宮の杜は植林された森ですが、林学の先達たちが自然林としての遷移を計画しました。都市の中の自然林として誇れるものと思います。

ところでヨーロッパの城は、石垣の上にさらに石で建物をつくりますね。日本の城も石

★ Key Words 「くまのもの 隈研吾と

ささやく物質、かたる物質」展
30年におよぶ建築プロジェクトの集大成として、2018年3月3日（土）～ 5月6日（日）に東京ステーションギャラリーで開催された。隈研吾が対話を重ねてきた素材に着目し、〈モノ〉の観点から分類展示された。

★ Key Words 明治神宮の杜

明治天皇を祀る明治神宮の鎮守の杜として造林された人工林。荘厳な杉林にすべしとした当時の大隈重信首相を説得して、ドイツの最先端の林学を学んだ川瀬善太郎、本多静六らが自然遷移による100年後の森の姿を予測しつつ設計植林した。360種を超える苗木10万本が全国から寄進され、現在は200数十種が自然の森を形づくっている。

★ Key Words しなやかに反応するデザイン

「負ける建築」で受動性のデザインを標榜してきた隈研吾さんはいま、その固定されたデザインから、より環境や与条件に反応できる「呼吸するようになしなやかなデザイン」を模索しはじめている。日本デザインコミッティーのHP参照。



◎隈研吾さんの本

『なぜぼくが新国立競技場をつくるのか』
日経 BP 社

『負ける建築』
岩波書店



★ Key Words ばいそういん きんめいもうそうちく
梅窓院の金明孟宗竹

東京都南青山にある隈研吾建築都市設計事務所の建物の前には、隣りにある梅窓院の参道に植えられた金明孟宗竹が心地よい空間をつくりだしている。



巻頭●対談

最終的な橋渡し先は、森林だと、わたしは思うのです。

を示しましたが、やはり木や竹は、人間のからだにとって、むかしからのいちばんいい友達だと思うのです。

沢田●ちなみに、事務所の前のお寺の竹★は隈さんが指示して植えられたのですか？

隈●そうですね。金明孟宗竹という竹で、お寺の住職と金明孟宗竹の林に行ったら、住職がこれはどんなことをしても自分のお寺に欲しいといって……（笑）。

沢田●下を通ったときに、これはもしかしたら隈さんが設計して植えさせたんじゃないかと噂していたんです（笑）。

展覧会では、10種類の素材を中心に、編む、積むといったさまざまな技法が紹介されていましたが、素材と技法を組みあわせたら何十もの組みあわせがあつて、これどうやって決めていくんだろうと疑問に思つたのですが？

隈●プロジェクト独特の条件つてあるじゃないですか。たとえば、建てる場所はこの場所に建てるのか、そこで手に入る材料はこれこれしか手に入らないとか、そのまわりで手配できる職人さんはこういう人たちだとか、必ず固有の条件があるので、その条件にいちばん合ったものを探していくと、自然に同じにならないで、みんなちがっていくんですね。**沢田**●その場所その場所、あるいはプロジェクト毎に必要なとされるものが自ずと決まってくるということですか？

隈●やはり人間の住んでる環境つてすごく多様で、建築物というのはその場所の上に建つので、自ずと多様性を示したものになってきます。ですので、こつちは無理に違つたもの

ように感じるんです。そこでの新しい技術開発が世の中を変えていくというふうな時代の流れの中で、日本は木材に関して長く深い蓄積があつた国にもかかわらず、最近ヨーロッパがむしろ先端的な面白いことをやっている。CLTも先行しているので、ぜひもういちど木だつたら日本、森林だつたら日本と言われるような研究に期待しています。

日本人の木に対する愛情とか関わり方つてすごく深いと思うんですね。だれの心の中にも木に対する愛情だけでなく好奇心もあるもので、そうしたことをぜひ研究につなげて頂いて、さすが日本だなということをやって頂けたら最高だと思ふんですよ。

沢田●ありがとうございます。建築の世界でも最近木造が見直されてきたということですが、一時期は木造で大きなものをつくっちゃいけないという法律や規制もありましたが、最近CLTなどの木質材料も開発が進み、期待感が高まっていると感じます。

隈●ものすごく変わってきていますね。20世紀は鉄とコンクリートの時代だった一言で要約できるのですが、建築雑誌をめくると誌面にグレーの建物しかでてこない。グレーと白しかないみたいなイメージだったんですが、最近の日本の建築雑誌をみて、海外の友人が木の色がふえた、茶色がふえたというんです。日本語を読めない人がページをめくつてはつきり時代が変わつたとわかるほどに、木というものが主役になってきたのかなあと 생각합니다。これは、とても大きい変化で、単にデザインの変化というのではなく、木の中

にしようとしなくても、自然に素直にそこに耳を傾けていけば、違うものが出来てくると言うところが、建築のある意味でいちばん面白いところでもあると思うんですね。

沢田●知識と経験の土台のうえで、感性に耳を傾けているんですね。

隈●いわゆるコンピュータで計算して最適解が得られるという世界とはちがうので、その場所に自分が立つてみて耳を傾けてみるという、そういう感性の場ですね。

沢田●隈さんが使われている木材は、どちらかというと小さい部材が多いようですが、CLT★にも関心がありますか？

隈●ぼくは小さい部材を使うことが多いのですが、CLTを使うことで木造の可能性がぐんと広がるので、そうした可能性もこれからの社会には必要なことだと思っています。木造の可能性が広がらないと、「木造は小さな数寄屋建築にはいいけどねぇ」みたいに言われるのは、つまらないと思うんです。いまのヨーロッパみたいに木造の集合住宅やオフィスビルが建つという時代になって、はじめて木造の時代と言えるんじゃないかと思うのでCLTのことも積極的に応援しています。

沢田●それは、大変ありがたいことです。森林総研としてはCLTが使われることで木材の利用量がふえ、森林と都市との間で大きな循環がまわることを期待しています。

最後にこれからの森林研究に対して、ご意見を頂けませんでしょうか。

隈●2000年あたりから、世界中で木材が時代の最先端になって、主役に躍り出てきた

心として社会システムの全体を見直す、経済のシステム全体を見直すという、経済や文化全体の大革命が木を通して起こりつつあるんじゃないかといつてもいいんじゃないかと思っています。

沢田●大革命というのは、すごいですね。

隈●ここがオリンピックのメイン会場になったというのも、日本にとって発信の絶好のチャンスだと思ふんです。ウオーターフロントは世界中いろいろありますが、人工林でありながら自然遷移をめざすという個性的な森があるということは、ヨーロッパの人もある知らない。すごい森だなあ、太古の森かなと思われているような森と今回の競技場がひとつにつながっているということをぜひ、わかつていただけたらいいなあと思います。

沢田●最近、研究成果の橋渡しということがよく言われております。「研究成果はなんなのか、成果を渡せ」ということですが、それは木材産業だけがよくなるのではなくて、最終的な橋渡し先は森林だと私は思うのです。

産業的にももちろん儲からないといけないのですけれど、その結果が現実に森林をよくしていくと、そこに研究成果というものが渡されていって、はじめて研究は結実するんだということをお互に話しております。

隈さんの建築哲学と新しい木材の利用が、日本の森林をも思つかせることになるのではないかと私は大変に期待しています。

隈●ぼくも、ぜひそういうふうになりたいと思つていて、最終的には森にお返しができればなあ、思っています。



『建築家、走る』
新潮社文庫



『自然な建築』
『小さな建築』
岩波新書



◎既刊特集号
参考12

季刊 森林総研 No.27 (2014.12.8)
特集：CLT 開発の現状 地方創生の切り札「シーエルティー」

★ Key Words 新しい木質材料 CLT

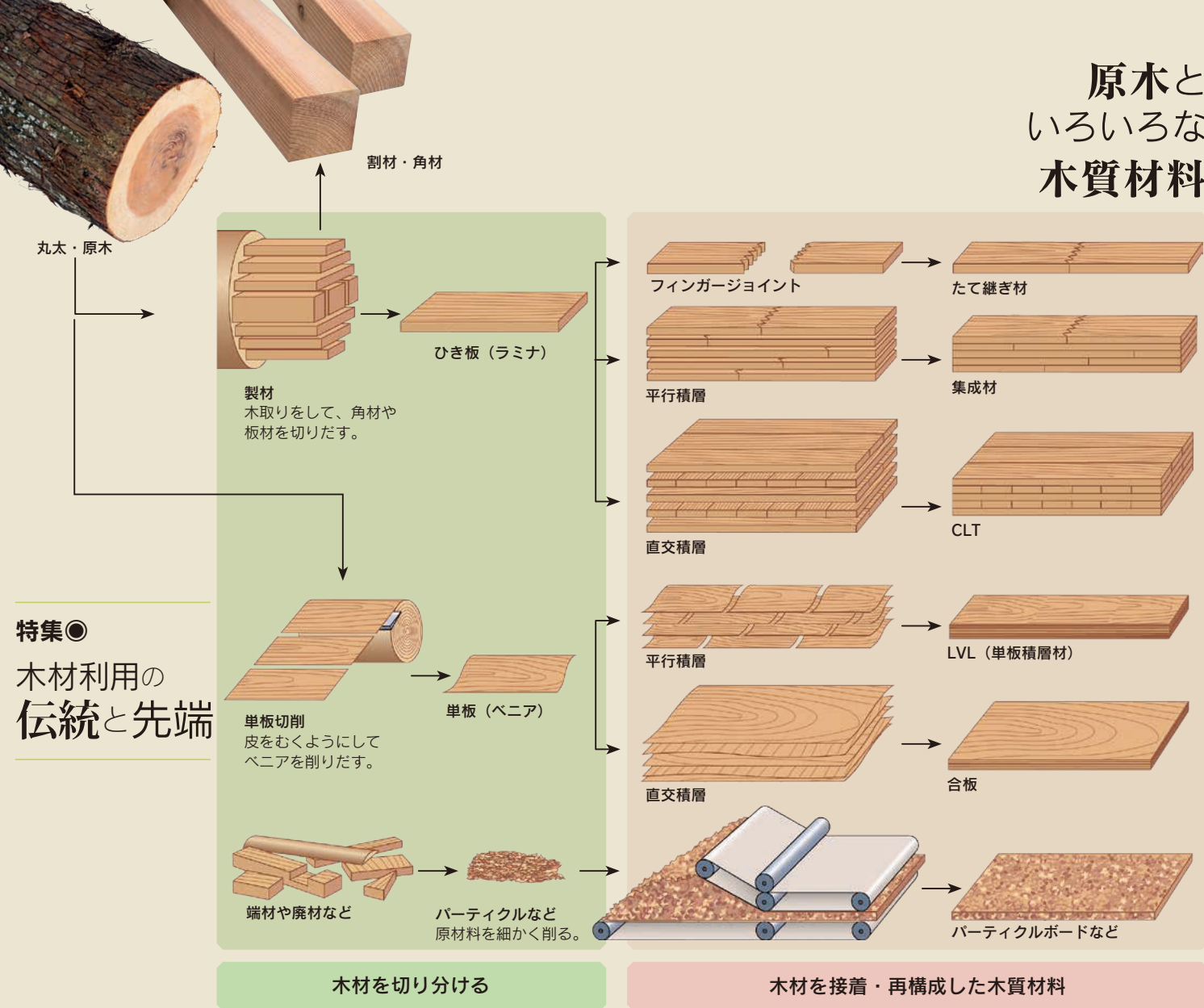
CLTとはCross Laminated Timberの略称で、1995年頃からヨーロッパで研究・開発された新しい木質材料。おなじ向きに並べたひき板（ラミナ）の層をその繊維方向を直交させながら積み重ねて接着し、一体化させた厚くて広いパネル。ビルの建材としても使うことができる。12、15ページ参照。



出典：国立国会図書館デジタルコレクション

国有林面積は、約 764 万 ha で国土面積の約 2 割、森林面積の約 3 割を占める。民有林は 1728 万 ha で国土面積の約 5 割を占め、あわせて国土面積の 67% が森林におおわれている。

8



特集● 木材利用の 伝統と先端

繊維方向の荷重や曲げなどに耐える強さを同じ重さあたりで比べてみると、圧倒的に木が強い素材であることがわかります。木材はもともと自然循環しているものですから、湿気に伴う菌の繁殖で腐りやすいという短所ももっていますが、管理の技術、たとえば乾燥した状態を保ったり、完全に水没していると長期間にわたって腐りません。つまり菌の働きをコントロールさえできれば木材は長期間強度を維持することができるのです。また、逆にいうとこのことは、不必要なときにはすぐに腐って自然に還ってくれて、再生産できる素材であるともいえます。

耐久性の面でもくらべてみると、コンクリートや鉄*は、300年持たないともいわれています。しかし、木を使った構造体は法隆寺の例にみるように保守管理を組みあわせることによって1000年を超えてもたせることもできます。

木材のちがった良さのひとつは、大きな部材の傷んだところをとりのぞいて、ひとまわり小さな材としてリユースができるということです。古い木造建築に使われていた柱や板も、削り直すことで新たな部材として利用したり、家具などの材として生まれ変わることが出来ます。また、端材や廃材からパーティクルボードを製造したり、紙パルプの原料にしたり、最後は燃料や堆肥として利用し、自

*インドの錆びない鉄柱

デリーにある古代に建てられた鉄柱は建設から1600年以上経つが、例外的にほとんど錆びていない。錆びない理由はまだ科学的には解明されていない。1993年クトゥブ・ミナールとその建造物群として世界遺産に認定された。

森林資源の用途

2016（平成28）年の国内生産量は2714万1000m³で、森林資源の63パーセントが用材として利用されている。
出典：林野庁「木材需給表」2017より作図

しいたけ原木 1.2%

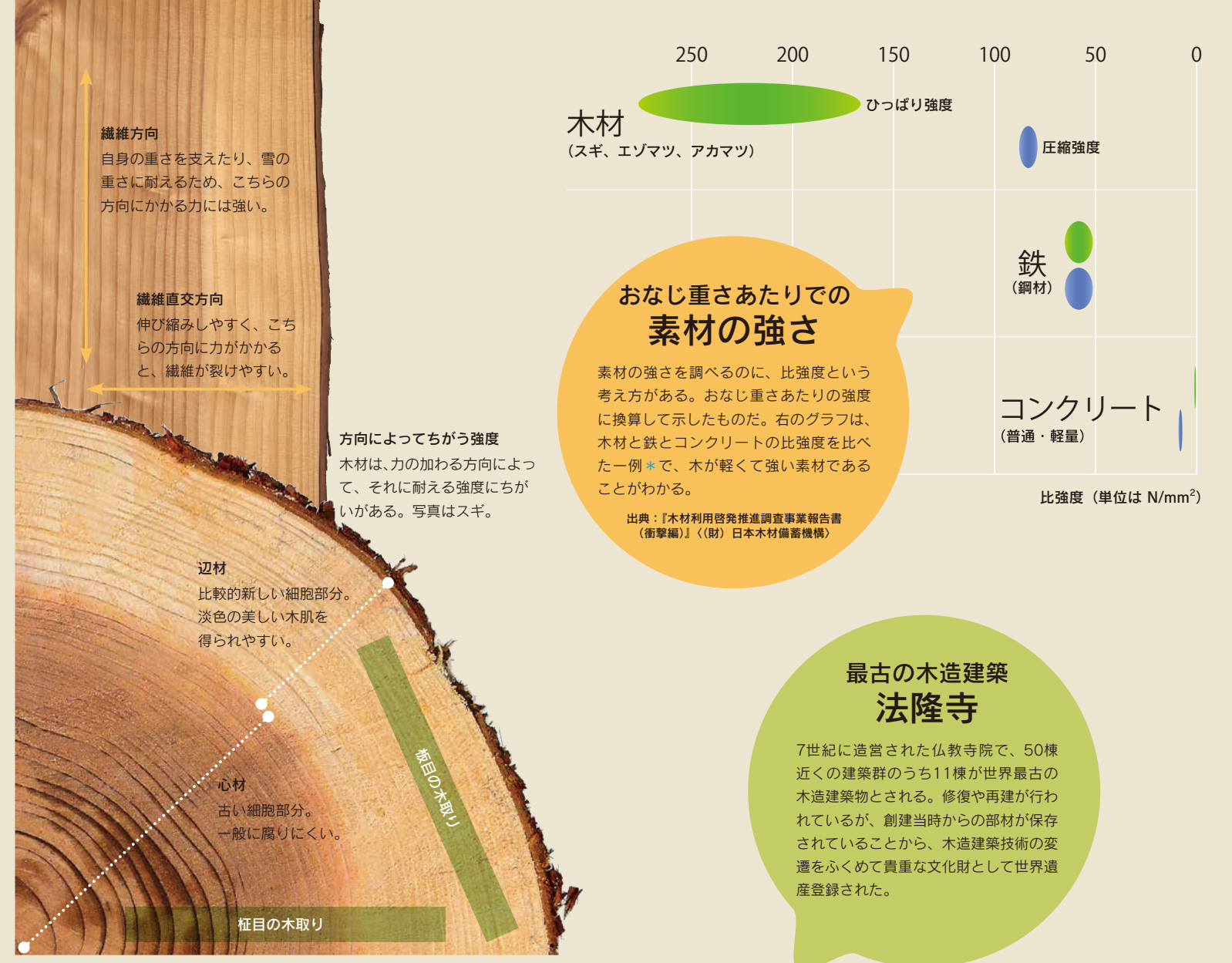
燃料材 16.4%

パルプチップ 19.4%

その他用材 3.8%

合板など 14.3%

製材 44.9%

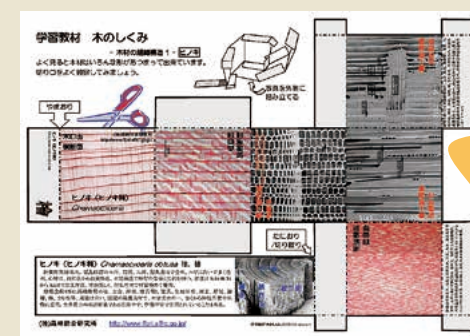


さなどの短所は使い方を工夫する一方で、自然の曲がりを逆手にとってその形を活かすような「逆らわない技術」が、当時の建築技術者つまり大工職人たちの技の真骨頂だったといえるかもしれません。

世界遺産として登録された法隆寺建物群を維持してきた高い技術力に、そうした日本の木造文化の源流をみることで出来ます。

法隆寺は、最古の木造建築とされていますが、1000年前に造られたそのままの状態で見られているわけではありません。そこには、木の性質を知り尽くした宮大工たちによる交換可能な木材の利用技術や、長期間にわたっての維持の知恵があります。部材は常に保守管理され、必要に応じて補修され、数十年ごとに解体されて傷んだ材は新しいものに交換され、使えるものは再利用されて、元通り組み立て直されて、使い続けられてきました。こうした技術は、木造ならではの制約の中で発達した技術でした。

木材の素材としての特徴



学習教材 「木のしくみ」

樹木の種類によって組織構造がちがっていて、その構造のちがいが、重さや強度のちがいが、耐久性のちがいなどと密接にかかわっている。下記にアクセスすると、木の組織構造を学ぶための教材をダウンロードできます。ご活用ください。

<http://www.ffpri.affrc.go.jp/labs/etj/Covers/20071003/>

* 右上のグラフについて

グラフは出典のデータに基づき作成した。実際の比強度の値は、木材では樹種、生育環境、試験体の切り出し方などによって、一方鉄・コンクリートでは製造方法などによって、大きく異なる。

研究者の横顔

Q1. なぜ研究者に？

大学の先生をしていた父親の朝の出勤時間が、ご近所のお父さんたちとちがって少しゆっくりだったのをみて。

Q2. 影響を受けた本など

『法隆寺を支えた木』（西岡常一、小原二郎 NHK 出版 1978）。30 年前には数少ない木材の科学的な情報をわかりやすく解説した本でした。興味を持って学生時代に取り組んだのは現在の自分のテーマとはまったく異なる木材の一面でしたが……。

Q3. 研究の魅力とは？

新しい材料 CLT をどのような形で世の中に普及させるのか。いろいろな立場の方々といっしょに考える現場に立ち会えたのは楽しい経験です。

Q4. 若い人へ

欧州で CLT が開発されていたちょうど同じころ、わたしも同じような材料の開発に取り組んだことがありましたが、木造ビルを建てることまでには考えが及ばませんでした。柔軟な発想とやり抜く意思が大切ですね。



宮武 敦 Miyatake Atsushi

複合材料研究領域

図1 CLTの製造工程

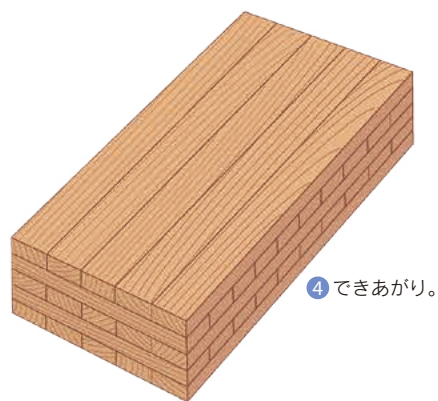
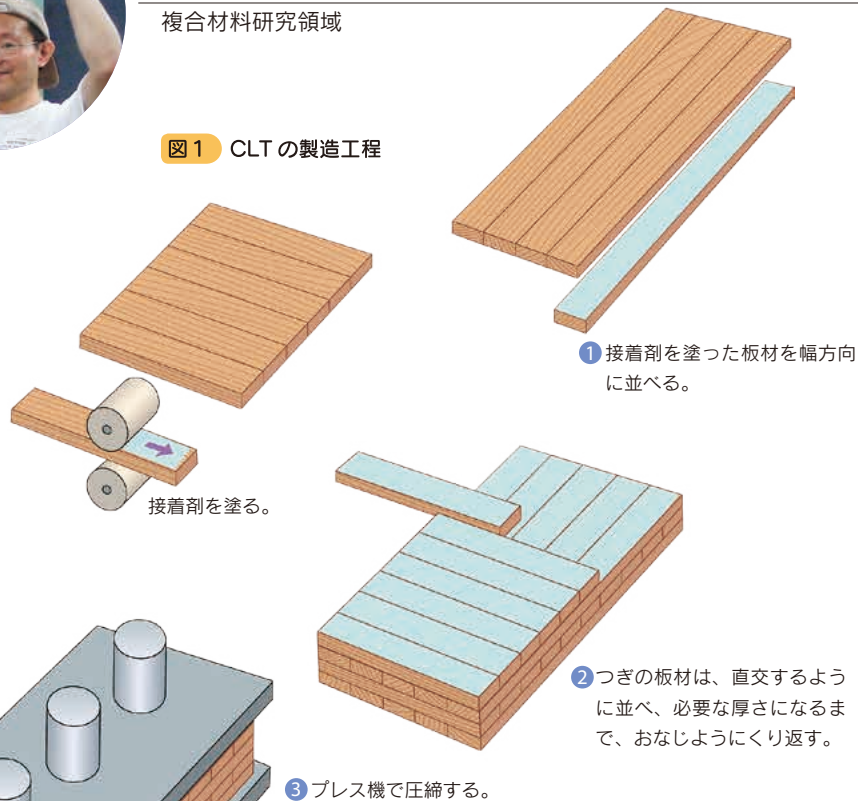


写真2 進化する試験体

研究を重ねるごとに試験体も、① 40 × 40cm (平成 23 年)、② 1 × 1m (平成 23 年)、③ 2 × 4m (平成 27 年) としだいに大きくなっていきました。



木造でビルが建つ！

CLTとは、どのようなものか？
日本の森林資源のおよそ半分は、おもに用材（土木・建築・家具などの材料）として利用されています（特集▼P.11）。建築では戸建て住宅や低層の共同住宅などが中心で、その構造材料には製材や合板、集成材などが使われています。
ところが最近、マンションやオフィスビルなどの中層建物（写真1）を建てることのできる木質材料が注目されてきました。名前を英語でクロス・ラミネイティド・ティンバー（Cross Laminated Timber）、日本語で直交集成板（以下CLT）といいます。CLTの開発が始まったのはおよそ四半世紀前のオーストリアでした。
丸太から製材した板材に接着剤を塗布して、まず幅方向に並べ、つぎにその幅の長さの板材を直交させて積み重ねます。これをくり返しながらかつ積層接着して一体化させ、幅が広くて長く厚いパネル状の木質材料としたものがCLTです（図1）。



写真1 オーストリアの7階建て木造マンション

自前の技術を開発するための研究
情報化の進んだ現代ですから、開発当初からCLT製造のようすを撮影した動画がYouTubeにアップされ、また、製品がどの程度の性能をもつかといった情報も容易に入手することができました。とはいえ、日本の木材を用いる場合に、どのように製造するのが最良か、地震や台風に耐えるための構造設計はどのようにしたらよいか、といった詳細な技術は自前で考えなくてはなりません。そこで、わたしたちはプロジェクトを立ち上げ、日本の樹種を用いて構造用材料として適正な性能をもつCLTを製造するための技術開発に取り組みはじめました。
適切な接着条件、長大な材料ゆえの寸法変化やねじれの量、構造用材料として必要とされる強度性能などについて、様々な製造条件との関係を明らかにしてきました。わたしは主として強度性能に関する研究に取り組みました。その結果、図2に示すように、層構成、ひき板の材質を変えたときの強度性能をCLTを製造する前の段階で精度良く推定することが可能となりました。
木造ビルの実現へ向けて
わたしたちがCLTの研究に取り組み始めた平成23年当時、製造メーカーでも1 × 4 mの製品を人海戦術で製造した

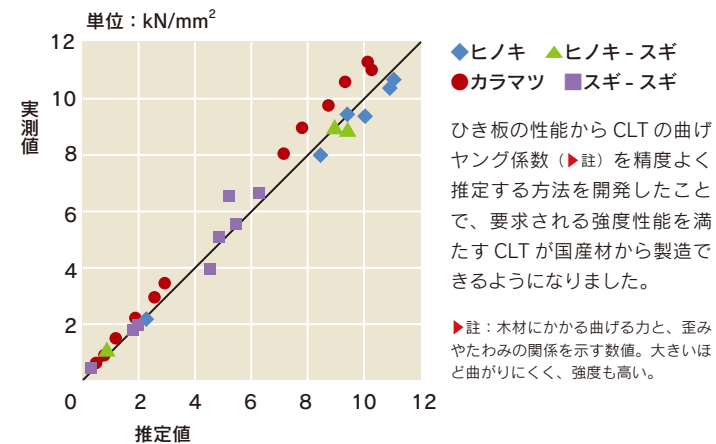


図2 CLTの強度性能（面外曲げヤング係数）を推定する



大勢の方々とともに研究に取り組めたのは、とても楽しい経験でした！

研究者の横顔

Q1. なぜ研究者に？

私は、長野県木曽町という山に囲まれた自然豊かな場所で育ちました。幼い頃から、森や木などの自然に触れたときに「ほっ」とするのを感じていました。そのリラックス効果を明らかにしたいと考え、研究者を志しました。



池井 晴美 Ikei Harumi

構造利用研究領域

Q2. 影響を受けた本など

『森林浴はなぜ体にいいか』（宮崎良文 文春新書 2003）。著者である千葉大学・宮崎良文教授（元森林総合研究所研究員）は、私の学部・大学院時代における指導教員です。

Q3. 研究の魅力とは？

本研究分野は、「木材」と「人」を対象とした研究が融合されて成り立ちます。しかし、世界的にも、この両分野の融合はなされていないのが現状です。我々の研究チームでは両方の視点から研究を進めているため、「Only one」としての強みがあり、そこに醍醐味があります。

Q4. これからの抱負

研究成果を世界に発信することによって、木材が持つリラックス効果の普及に貢献したいと思います。

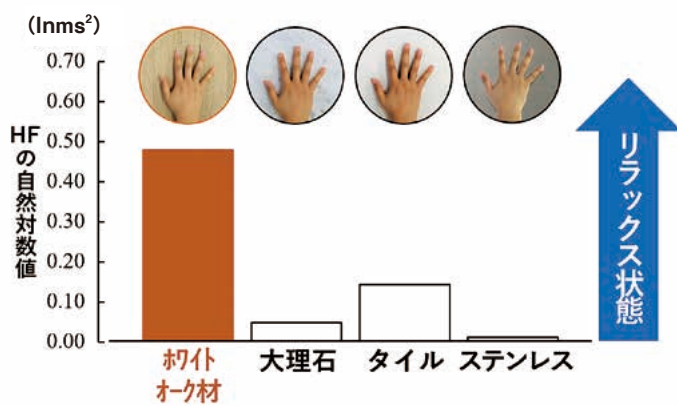
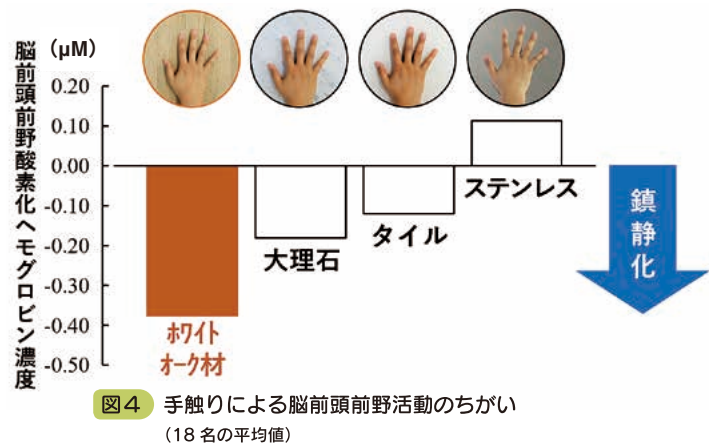
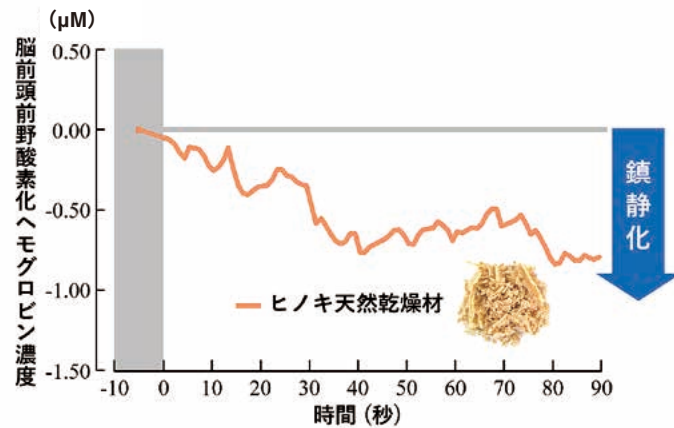


図4と図5は、Ikei H et al. Int. J. Environ. Res. Public Health. 14(7) 801, 2017を改変



Ikei H et al. J. Wood Sci. 61 537-540, 2015を改変

木材の生理的リラックス効果 香り・手触り・足触りから

研究の森から

木材は、古くから住宅や家具等の材料として用いられ、その香りや手触り、足触りは人に「心地よさ」をもたらすことが経験的に知られています。

では、なぜ木材の香りや触感、人を心地よくしてくれるのでしょうか？じつは、まだ科学的な答えはみつかっていません。本稿では、木材のもたらす生理的リラックス効果についての最新の研究をご紹介します。

どこに着目したか

「心地よさ」を、どう評価したらよいと思いますか？「心地よさ」を数値化するために、つぎの点に着目してみました。

脳の活動のようすを知る手法のひとつに、近赤外分光法を用いて前頭前野（前額部）の酸素化ヘモグロビン濃度を計測する手法があります。酸素化ヘモグロビンとは、血液に乗って酸素を運搬するヘモグロビンで、脳が活動するとその部位の濃度が上昇し、リラックスすると低下することがわかっています。

また、自律神経活動について心拍変動性に着目しました。心臓は規則正しく心拍を打っているように思われていますが、実際には1拍ごとの心拍間隔は揺らいでおり、その揺らぎに交感神経活動・副交感神経活動が関わっています。その揺らぎを周波数解析することで、リラックス

時に高まる副交感神経活動とストレス時・覚醒時に高まる交感神経活動に分けて計測できるのです。

木の香りを嗅ぐと

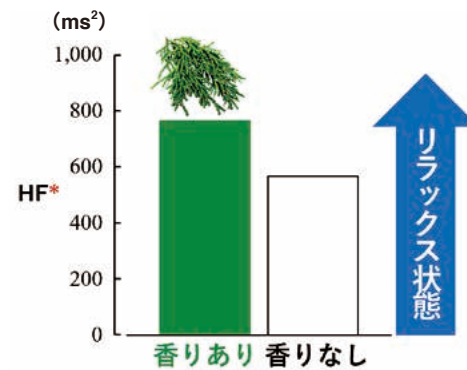
日本の代表的な樹木であるヒノキの葉の香りは、人にどのような効果をもたらすのでしょうか。

温湿度および照度を一定に調整した人工気候室において、20代女子大学生にヒノキの葉から抽出した精油の香りを90秒間嗅いでもらいました。その結果、ヒノキの葉の香りは、脳前頭前野活動の鎮静化をもたらした（図1）。リラックス時に高まる副交感神経活動を亢進（高めること）させ（図2）、生体を生理的にリラックスさせることがわかりました。

さらに、天然乾燥したヒノキ材チップの香りも、脳前頭前野活動を鎮静化させること（図3）、木材由来の成分であるα-ピネンやD-リモノンの香りは、リラックス時に高まる副交感神経活動を亢進させることも明らかとなりました。

木を手や足で触ると

無塗装ホワイトオーク材を手で触ったときのリラックス効果について、大理石・タイル、ステンレス板など他の建築素材と比べてみました。香りの実験と同様に、人工気候室内において20代女子大学生に、



* HFは、High Frequency（高周波成分）の略で、副交感神経の活動を表す。

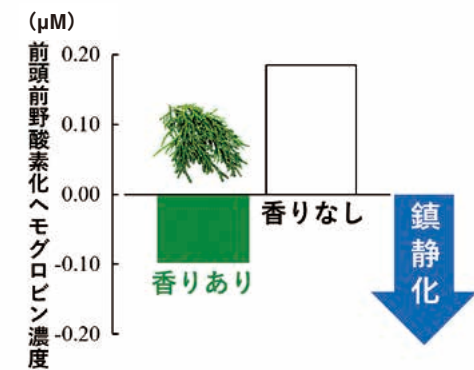


図1と図2は、Ikei H et al. J. Physiol. Anthropol. 34 44, 2015を改変

木材・プラスチック複合材 (Wood Plastic Composites 以下: WPC) は、木粉とポリエチレンやポリプロピレン、塩化ビニルなどの熱可塑性プラスチックを加熱しながら練り合わせ成形・製造する新しい木質系材料です。間伐材、林地残材などの未利用木材やプラスチック廃棄物を原料にできることから、環境負荷の小さい材料として注目されています。

WPCはプラスチックにはない木質感をもつ材料であり、ウリン、イペ、ジャラなどの高密度の南洋材と同等かそれ以上の耐朽性、耐水性を持つことから、主にデッキやルーバーなどのエクステリア資材として利用されています(写真1)。

日本国内でWPCがエクステリア資材として使用され始めた当初には、高い耐朽性、耐水性をもつWPCは、メンテナンスフリーの材料と考えられていました。しかし、長期にわたって屋外で使用される間に、変色やチョーキング(太陽光と雨水の影響によ



小林 正彦 Kobayashi Masahiko
木材改質研究領域

木材とプラスチックを融合させてつくる新しい材料(木材・プラスチック複合材)



写真1 WPCの施工事例。
デッキ(左)と、ルーバー(右)

森林講座のお知らせ

10月6日(土曜日)
「木材が人にもたらすリラックス効果」
池井 晴美(構造利用研究領域)

11月10日(土曜日)
「スギやヒノキの幹の形は葉の量で決まる」
荒木 眞岳(植物生態研究領域)

12月8日(土曜日)
「森林は二酸化炭素を吸っている? 吐いている?」
安田 幸生(森林防災研究領域)

2月15日(金曜日)
「樹木もストレスを受ける!」
横田 智(樹木分子遺伝研究領域)

3月16日(土曜日)
「災害調査に使われる最新技術」
村上 亘(森林防災研究領域)

会場●多摩森林科学園 森の科学館
時間●13時15分~15時
受講料●無料(ただし、入園料として大人300円、子供50円必要となります。)お申込の受付は各講座開催日の前月の1日から。受付は先着順で、講座開催日の1週間前が締切となります。ご希望の講座名・郵便番号・住所・氏名・電話番号・参加希望者数をご記入の上、往復はがき、または電子メールでお申

し込みください。なお、それぞれのお申込1通に対し、1講座3名までの受付とさせていただきます。

◆お問い合わせ
〒193-0843 東京都八王子市廿里町 1833-81
多摩森林科学園
電話番号: 042-661-1121
Email: shinrinkouza@ffpri.affrc.go.jp



◀電子メール送付先
二次元バーコード



▼講演会

平成30年度
森林総合研究所公開講演会
「水を育む森林」

日時 平成30年10月16日(火)
13時20分~16時40分

会場 ヤクルトホール
(東京都港区東新橋 1-1-19
ヤクルト本社ビル)

入場無料・予約不要

森林総合研究所では、「水を育む森林」をテーマに公開講演会を開催します。

今回は、サントリーから、民間企業としての水資源研究や水源涵養活動への取り組みを紹介頂くとともに、雪と森林、水質と森林、森林内の水移動など森林と水に関する最新の研究成果について解説します。酷暑の今年だからこそ、水源としての森林の役割について、皆様と一緒に考えてみたいと思います。多くの方々のご参加をお待ちしています。

＜講演プログラム＞

●開会挨拶

●招待講演
水と生きる
持続可能な水資源を目指して
サントリーグループバイノベーションセンター株式会社水科学研究所
近藤 平人氏

●講演

●森林流域からの水流出
「わかったこと、これからの課題」
森林防災研究領域 領域長
玉井 幸治

●森林が積雪・融雪に及ぼす影響
「水資源の確保に向けて」
森林防災研究領域 水保全研究室長
野口 正一

●ポスター発表



●講演

●森林のきれいな水を育み大気からの多量の窒素素入
立地環境研究領域 土壌特性研究室長
小林 政広

●全体質疑

●開会挨拶
森林に降る雨の旅程を科学する
森林防災研究領域 主任研究員
南光 一樹

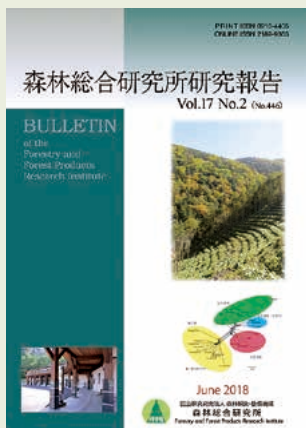
森林総合研究所研究報告

▼論文

台風攪乱から43年が経過した枯れ林における地上部及び地下部現存量の変化(英文)
岩本 宏二郎、鶴川 信、荒木 眞岳、壁谷 大介、石塚 森吉、梶本 卓也

木材腐朽菌30株による4色素、レマンールプリンアントブルー、Poly R478 Poly S-119、Azure B 脱色試験
高野 麻理子、服部 力、根田 仁

スギの遺伝的地域性識別のためのS



▲森林総合研究所研究報告
Vol. 17 No. 2 (通巻 446 号)
2018年6月
<https://www.ffpri.affrc.go.jp/pubs/bulletin/index.html>

事務所内装写真を用いた聞き取り調査に対する対応分析の有用性について
末吉 修二

NPパネルの開発と利用
内山 憲太郎、松本 麻子

▼短報

札幌市街地周辺におけるエゾシカのスポットライトカウント調査
松浦 友紀子

▼研究資料

次代検定林の成績によるトドマツ精英樹集団からの優良系統の選抜
中田 了五、坂本 庄生、西岡 直樹、花岡 創、来田 和人、今 博計、石塚 航、黒丸 亮

カンボジアにおける森林土壌炭素蓄積に関するデータセット(英文)
鳥山 淳平、今矢 明宏、平井 敬三

インドネシア共和国東カリマンタン州の昆虫相ならびにその生態に関する文献目録
横原 寛、スギアルト、藤間 剛、ウオロ・スルジト、松本 和馬、前藤 薫、上田 明良、滝 久智

次号の特集

次号43号の特集は、「震災7年目の森」と題して、東日本大震災で引き起こされた福島第一原子力発電所の事故による森林の汚染とその後の経過、林業者たちの現状、研究の現在をお届けします。

対談は、チェルノブイリ原発事故の

被災地域で、ふるさとにとどまって暮らしつづけた人びとを描いたドキュメンタリー映画『ナージャの村』『アレクセイと泉』を撮った映画監督・本橋成一さんと、当研究所 震災復興・放射性物質研究拠点長の三浦寛です。乞うご期待。

公開講演会等の最新情報は
こちらから→

<https://www.ffpri.affrc.go.jp/event/index.html>

お問い合わせ
森林総合研究所
企画部 広報普及科 広報係
TEL 029-829-8372
Email kouho@ffpri.affrc.go.jp

